

『主イエスを信じることで…』 ヨハネ14:12-14

14:12 よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。

14:13 わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。

14:14 何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。

●序論

先週、紹介した「主われを愛す」という賛美

1. 主われを愛す 主は強ければ

われ弱くとも 恐れはあらし

※わが主イエス わが主イエス

わが主イエス われを愛す

この歌詞には、すべて主イエスさまがしてくださったことを、そのままシンプルに歌い上げています。すべて主イエスさまが主語です。

「主イエスさまがわたしを愛してくださっている！」と大胆に繰り返して表しています。わたしを愛してくださっているイエスさま、というお方が定まっていると、聖書がわかるようになる。そして事実イエスさまの愛が13章の始まりに証言されています。

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。さて、この賛美をあは、自分が主体・主語の世界を離れることになります。

「神さまが、わたしを…」という神さまがわたしに向けてくださる恵みの世界の中に自分を置いて、そこではじめて「わたしにも何かできることがある」ということができるのです。

”愛されている。だから安心できる。” …それがわたしたちが経験すべき祝福なのです。

14:1 「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。

「主イエスを信じることで…」、どれほど大きな安心の中に入るか、語られています。

●本論

I. 信じる者の祝福に入る

ここで、イエスさまは、とても大切なことを伝える表現をもって語りかけています。

14:12 よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。

このところだけが引用されると、わたしたちは、「わたしにもできる」「イエスさまと同じことができる」「いやそれ以上のわざが行える」ということに関心がいき、

” することができることを信じていなさい…” という風に理解されることがあります。ここで「わたしを信じる者は…」というとき、少し前のところに目をやります。
14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。

今日、ここで最も大切な強調点は「わたしを信じる者は」…だ、ということです。かつて、イエスさまは「信じること」についてこんな風にも語られました。

ヨハネ6:29 イエスは彼らに答えて言われた、「神がつかわされた者を信じるのが、神のわざである」。

だんだんわかっていくこと。それは、わたしたちが「イエスさまを信じる」ことは、すなわち、その人生での主役をイエスさまにゆずることなのです。

英語でBelieve in Jesus 「in 中で」という表現を使う、そのことに意味があります。

自分の生活、歩み、人生をイエスさまの中に置いて、信頼することです。そうすることで、わたしたちはイエスさまが主役で、イエスさまが愛してくださって、イエスさまが導いてくださって…、そういうイエスさまを信じて生きるという世界に入ります。

この言葉は、世間でよく言う「まず自分自身を信じなさい」という、「わたしは自分を信じてこれをやり遂げました」というような、魅力的に聞こえる言葉と、距離を置く表現だとわかります。

イエスさまは違う。むしろ「わたしを信じなさい」と招いてくださっているのです。

Ⅱ. イエスさまのみわざの世界に入る

「イエスさまのみわざ」というとき、何が挙げられるか

1. 奇跡や癒しのみわざ

今もわたしたちは、主にある奇跡や癒しを通して主を証しします。

2. 福音宣教のみわざ

弟子たちは聖霊の力を受け、より多くの人々に福音を伝えるようになります。今や全世界に宣べ伝えられています。

3. 仕える者としての姿（僕となって弟子たちの足を洗う）

このことを踏まえて、イエスさまの言葉をもう一度見ておきます。

14:12 よくよくあなたがたに言う。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。

「大きいわざをおこなうであろう」という言葉は、だれにとっても魅力的です。

そしてそのようなわざを行う信仰者になりたい…。

その上で、よく考えてみてください。わたしが突然変身して、そういう風になれる…、そんなことができるわけではありません。

「主イエスを信じることで」、イエスさまの恵みにわたしたちは包まれるのです。

「主われを愛す」の祝福の中に、身を置いて、この言葉を聞くのです。

わたしの周囲に、わたし自身の人生に、わたしの出会いと行動と言葉に、わたしを愛

してくださっているイエスさまのみわざがなされていくという経験へ招かれるのです。でもイエスさまは「わたしが父のみもとへ行くからである」という風に、わたしたちから離れていくと言っているし、どんどん距離が遠くなるのでは…と思うかもしれませんが。

イエスさまはこの後、こう語られる言葉を先に聞いておきましょう。

ヨハネ16:7 しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。

ヨハネ14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。

イエスさまが父のみもとに行かれたからこそ、今、聖霊さまがわたしたちのもとに来て、わたしたちを通して、その善い業をしてくださるのです。パウロの経験です。

ローマ5:5 …なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

聖霊を通して注がれるのは、どれだけわたしたちが愛されているか…、そのことです。

Ⅲ. イエスさまの名によって願う祈りに入る

14:13 わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。

イエスさまの名前によって…、それはいわゆる”お題目”ではありません。

イエスさまの御名によって祈ることで、

①キリストが十字架で、わたしたちの罪を贖い、父なる神さまの赦しと和解を思います。

わたしはかつては、神に背を向けいていた、けれども今はイエスさまによって、その名によって、神の子とされた。まっすぐ祈ることができる…という祝福です。

②すべてをキリストの主権にお任せするという信仰の言葉でもあります。

この言葉を通して、わたしたちが祈る時、祈ったならば、”こと”の主権はイエスさまの方にお渡しすることが大切です。

決して、私が祈るから、わたしがこれほど願っているのだから…、ということにとどまらず。すべてイエスさまにゆだねて、次の一步に進みだすことです。

わたしは、映画「祈りのちから」のノベライズ本を何度も読み返しています。

主人公の女性は、夫の裏切りを不思議な方法で知らされたとき、その夫との結婚生活の回復のために、また彼の救いのためにこれまで祈り続けた時間と労力が、すべて泡に帰してしまうような脱力感に襲われました。…そんな中で、彼女の祈りは、変えられたのです。

主人公の女性は、へなへなたお床に座り込んだ。しばらく何も考えることができず、ぼんやり宙を眺めていたが、ふと先ほどささげた祈りが心によみがえってきた。

そうだ、…さっき、「信仰を与えてください」って祈ったじゃないの。「神の守りと導きにゆだねる」って約束したんだったわ。一人の力ではとても耐えられそうにないこんな時こそ、神を仰ぎながら歩むチャンスかもしれない…。

彼女は、天井を見上げ、力を振り絞って祈り始めた。「神さま、どうか助けてください。今までちゃんと祈ったことがありませんでした。あなたに心から従っていませんでした。。でもお願いです。今あなたの助けが必要なのです。」

その祈りにどんな変化があったのか。それは自分では戦いきれない、自分だけでは無理だ…、そうくずおれて、ただ神さま頼る祈りへと変えられていったということです。

イエスさまの名によって祈る…ということは、効き目のある祈りの決まり文句ではなく、その祈りと願いのすべてを神にゆだねて最後に、アーメンと結ぶためのものです。そうして聞こえてくる聖書の言葉に気づくことです。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。(エレミヤ33:3・新改訳)

●さいごに

14:13 わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。

「父が子によって栄光をお受けになる」とはどういうことでしょうか。

ピリピ2:10-11 それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

「イエスは主である」告白することで、父なる神は栄光をお受けになる。

14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。

心から信じることで、わたしたちとイエスさまとの信仰の関係が正されます。

教師と弟子の関係から、父なる神と一体である主として仰ぐとき、その関係は当然改まります。

実は、わたしたちの祈りの中心にある課題は、わたしたちの願いがかなうかどうか、ではありません。

イエスさまの名によって祈る中で、このイエスさまとの関係を見つめなおすチャンスとなっているのです。

そういう中で、「わたしを愛するイエスさま」という確信が新たにされるとき、その祈りを通して、わたしたちは神がなしてくださる神わざを信じることができ、またこのことを通して父なる神さまは栄光をお受けになるのです。